
宇宙の樂園～ソラノラクエン～

ユヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙の楽園〜ソラノラクエン〜

【Nコード】

N8679D

【作者名】

ユヤ

【あらすじ】

あなたは、神さまにだって逆らえる。

Prologue (前書き)

俺の看板作品は、本当はモンハンじゃなくってこっちの筈だったんですけどね……。でもたぶん、更新は亀で気紛れです。ですが、ほんの少しでも読んで頂けるのならとてつもなく嬉しいです。もし感想なんか頂けちゃうと、それだけ三日間は泣けます。

Prologue

漆歴三千五百年……。

悲劇の形にほど近い人類の新たなる革新的チカラの根源は、ここで発見された。

地表から数百メートルも潜った、薄暗い洞窟内にある二つの影。松明で照らされたそのうちの一つは、白髪の老人のもの。そしてもう一つは、中年の、中肉中背の男のものだった。

「教授、これは……？」

中年の男が問う。教授と言われた老人の手には、赤い、小さな宝石があった。

「ああ、間違いない、漸く手に入れたぞ……！ これは間違いない、神々が世界を創造する際に落としたチカラの欠片だ……！」

老人は狂気に程近い、凶悪な笑みを繰り出す。漸く手の届いた、たった一つの強欲を握り締めて……。

二人の足元には、色とりどりの宝石群が広がっていた。見渡す限り一面の色、色、色……。

歩けば擦り合わせりガラスの様な音を奏でる、広い洞窟の床に絨毯の様にバラまかれたこの宝石は、遙か昔、まだ漆歴以前の世界に暮らしていた者達の残した『創世の力の残りカス』だった。

「これさえあれば、我々は神に近づく事が出来る！ 人類の、新たなチカラの開眼によってな！」

「教授が、その新人類の第一人者ですよ！」

……この世界は、荒んでいた。

偏見。差別。迫害。争い。殺戮。奴隷。殺戮。争い……。
そんな醜悪な悪循環が平然とまかり通る様な、醜い世界……。

「くくく……！ ははははっ……！」

そしてここには、洞窟に響き渡る老人の醜い高笑い、人類の革新へ向けて発現する、創世のチカラがあった……。

これは、こんな薄汚れた泥だらけの世界の、ほんの末端部分を切り取った、最大の戦いを綴った物語である……。

「どうか、この美しく醜くい世界に、悠久の光を」

「『ソラ』へ向けて……」

Prologue (後書き)

どうか、あなたが素敵な夢を見られますように……。

第一章『新しき戦』（前書き）

物語全体の第一章に当たるお話の、いわゆるプロローグです。

『ゲータイ小説』という『手軽さ』こそが最大の武器であるメデアからは少し逸脱した作品を目指していきたいと思います。もし宜しければ、是非、最後までお付き合い下さいませ。

第一章『新しき戦』

漆歴四千六年。二月。

雨。天空から深々と降り注ぐそれは、窓に優しく触れ、滝となつて流れていた。

狭い室内……というには少々贅沢なここは、広さにして約十二畳程度の、たった今巨大なデスクに腰を据え若干十七歳の青年二人に話しをしている教官長に与えられた、特別な部屋だ。

「というわけで、君達は明日からBクラスに編入する事になったから、よろしく頼むよ」

だがよくよく見るとこの教官長、なかなか剽軽な出で立ちである。スツと立った割に根元だけボテツとした鼻はまあ置いておくとして、何を勘違いしているのか、まずはこのくるくるカルのヘアスタイルだ。旋毛から僅かに生え始めている髪から察するに元々は茶色なのだろうが、それをわざわざドギツイ金色に染めていて、首を動かす度にいかにも偉そうにふわふわと揺れている。しかもその赤い服やらキンキラキンの装飾品は、どこぞの貴族でもあるまいし、何かが根本的に間違っている。オマケに、外見的な判断だけでは年齢不詳だし。

「はい、よろしく願います」

ちなみに返事をしたのは片方の青年だけであり、専ら教官長を『変だ』と感じているのは、件の教官長の話しを右から左に受け流している、返事をしなかったもう片方の青年。クセのない、サラサラの黒い長髪を高い位置から垂らす様にポニーテールにした精悍な面構えの青年、否『彼女』の名は……。

「教官長さん」

怪訝な面持ちのまま、黒髪ポニーテールが口を開く。

「なんだね？ あー……」

だが教官長の口からすぐにその名が出てくる事はなかった。

「……レイナ」

「ああそうそう、レイナ君だったね」

『レイナ』それが、言わずもがな彼女の名だ。

キリツとつり上がった目尻に、整った鼻筋。そして、鋭く、相手をくり貫く様な眼差しは、彼女のトレードマークであり、同時にある種のウィークポイントでもある。

「何か質問かね？」

教官長は問うと同時に、巨大な椅子の背もたれに深く沈み込んだ。またあのくるくるカールが劇軽に揺れる。

レイナは、少々の笑いを堪えつつも腕を組んで、教官長と自分の隣にいる黒髪の青年を交互に見やり、言った。

「あのさ、私がいきなりBクラス編入ってのは判るけどよ、何だつてアルもBクラスなんだ？ こいつ試験でなかなかのヘタレっぷりを発揮してたじゃねえか」

「なあレイナ。頼むから俺を見る時にそんな風に蔑む様な眼差しを

向けるのは止めてくれ」

が、レイナはそんな青年の訴えには耳もくれずに続ける。

「だってさ、私の総合ポイントは六百二十七ポイントで、アルの総合ポイントは百五十一ポイントだぜ？ 見るよこの差。ははっ、マジ笑えんだけど。ねえ、教官長さん？」

本当に笑っている。何と言うかこう、無様なモノの醜態を上から見下す様に足蹴りし、容赦なく突っぱねて、周囲の空気に同意を求める感じだ。

「まあ良いではないか。我々としては、アルミス君は『Cクラス以上Bクラス以下』という何とも評価の付けがたい位置にいるのだよ」

「何だよそれ。要は『試験やってみたら最後に指先だけ引つかかってたから』面倒くさいから良いや」って理由で教官長さんに引っぱり上げてもらった」ってわけか」

「そついう事になるね」

「かぁー、情けない」

「あの一、もしもし……」

レイナの隣でどこか隔離された気分にも陥れられているのが、彼女とは幼なじみであり、ここ『ゼルス養成学校』に來期から編入する予定である、黒髪の、どこにだっていそうな至って普通の青年『アルミス』

「二人とも、何か俺の扱い方酷くないか？」

「っさい、悔しけりやレッドドラゴンの首の一つでも持って来てみやがれ」

が、そんな訴えもまたレイナに一蹴りされた。彼はただ、普通に人間として扱って欲しいだけだと言うのに。そもそもレッドドラゴンなんて化け物、レイナだって倒せやしない。

そしてその間に入り込む様、教官長が漸く話しの軸を戻そうと躰を起こして巨大なデスクに腕を置き、口を開いた。

「まあ何はともあれ、君達はこれで晴れてここ『ゼルス養成学校』のBクラスの生徒だ。長くなるか短くなるかは君達次第だが……まあ適当にやってくれたまえ」

ここで言う適当とはつまり、そういう事である。決して『いい加減に』などという意味合いは、一切持ち合わせていない。

アルミスもレイナも、再び教官長に視線を集中させ、その言葉に耳を傾けていた。しかし……

「話しは以上だ。うむ、退室して構わんよ。寮の部屋については、後から寮長あたりの係の者を向かわせるから、それまで向かいの部屋で待っていたまえ」

すぐさま解放となる。退屈な話の束縛から逃れたのを確認すると、アルミスとレイナは同時に振り返り、出口に向かってこれまた同時に踏み出した。

「……………」

そして教官長は、その背中を神妙な面持ちで見送る。そして最後にその背中に掛かった声に、二人はまるで、気が付く様子はなかった。

「……ようこそ、ゼルス養成学校へ……」

第一話『その、笑顔と握手と代償と……』

第一話

『その、笑顔と握手と代償と……』

雨はまだ止んではいなかった。それどころか、その雨足は強くなっている様にすら思える。

「……………」

少年は、もはや深々と……という表現では利かなくなった窓に滝を作る水を、ソファに座ったまま、待合室の窓を貫き見上げた。

雨は、彼の気持ちがある程度静めてくれる。

「……………長かったな」

不意に、目の前の小さなテーブルを挟み、そのソファに向かい合う様座ったレイナが口を開いた。

だが向けるのは視線だけで充分だった。だからアルミスはそうする。顔は相変わらず窓に向いて、瞳だけを、レイナに。

理由はある。簡単だ。今の彼女の言いたい事くらい、皆まで言わずとも判るのだ。

二人は昔からそういう関係だった。もつとも今まで育ってきた環境がそうさせずにはいなかった……という方が正しいのだろうが。

二人が育ってきた場所……。それはどこの公園にもある様な、小さな砂場や風を受けて揺れるブランコなどはあまりにかけ離れていた。相手の意思を先読みして汲み取る事もともに出来ない様な人間には、少々酷な場所。

「長かった……………」

膝に立てた両腕に頬を寄せ、同じ事を呟く。ひょっとしたら、それは自分だけに向けた言葉だったのかもしれない。だからとは言わないが、アルミスは返事をしなかった。ただ黙ったまま今度は顔ごと、視線をレイナに向ける。

「そう思う？」

だが、自然と自分とは違う価値観を求めるもの……問い掛けが唇から滑り出していた。

「待ち遠しかったからな……。お前こそそうだろう」

二人がここに来た理由は同じだった。だが、それで結論が同じになるというわけではない。

「入学を先に提案したもの、お前だ」

戦う事……。

それは、死なずに明日を見るためには当たり前前の事だった。

そして生きる理由も、戦う理由も同じだった……。

だが戦う理由は、今となつては違うものにすり替えられている。もつとも、それが生きる理由とまではいかないが……。

「戦う理由だつて、同じだろ……」

同じではない。経緯こそ限りなく近いが、到達点は違う。

だが全く同じものの中にはあつた。そして、それがどれだけ大切なものかと言えば、その大きさも同じなのだろう。

それなら……。

「『なら』俺もそうだな」

「……何だよそりゃ」

理由は訊かない……。

知っているから……。

どうして彼が、彼女が戦うのか……。

誰の……そして、何のために……。

「はいはい失礼しますよー」

だが、一瞬の間を置き待合室のドアが開いた事で、その話題は強制的に打ち切られる。もつともこの介入があるうとなかると、何時までも同じ話題が続いていたかどうかは判らないが。

「あ、と……そう、一応確認な。あんたらが噂の転入生だな？」

二人の視線を浴びる介入者は、如何にもヘラヘラした感じの、長身の男だった。茶色く染められた髪をその細長い指でわしわしと掻

き『こう湿気が多いとセットが決まらん』だの『傘差したって濡れるんだからな』だの、何やらブツクサ言っている。

「噂？」

先に口を開いたのはレイナだった。不服な事でもあるのか、ソファに座ったまま男を睨み上げる。

「おいおい、質問してんのはこっちだろ。先に答えてくれよな」

「……そうだ」

隠す必要もないので、そのままレイナが答えた。もともと、ここで違うと言ったところで騙せる筈もないし、そもそも寮まで案内してもらおうという当初の予定も、よく判らない方向へ向かってしまうだろう。

「素っ気ないな……。まあ良いや。ようこそ、ゼルス養成学校へ」

十

やはり二人は男の案内で寮に向かう事になったのだが、あいにく雨が止む様子はなく、致し方なしにその中を歩く事になった。

雨のせいなのか、それとも、この閑散とした人口密度のせいなのか……。どこことなくノスタルジックな雰囲気放つ学校の敷地内を、淡々と行く三人。

どうやら敷地と言ってもその姿は様々らしく、周囲を高い高い隔壁に囲まれた空間の中に、一度に幾つものスポーツが出来る程広いグラウンドや、野球ドームの様に広い格技場に加え、巨大な港の様に広大なフリースペースもあると言うのだ。そしてここは、一見住宅街にも見える寮のジャングル。もっとも、背の高い寮が建ち並んでいるわけだから住宅街よりはどちらかと言うとビル街の方に近いのかもしれない。

この世界には、世界中の小国や大陸国家の経済をもひっくり返して、世界そのものを統制する機関がある。『四ツノ葉グループ』それが、世界を統べる巨大政府機関だ。

だがそれは、その機関の決定に従うつもりのない組織や団体によるテロや、暴動の起こる危険性が常に高い次元にあると言う事でもある。しかも倒すべき相手が一つしかないのなら、それは尚更である。

そう。まるで、街角で起こる不良同士の喧嘩の様に、どうしようかと考える必要もなく『簡単に、行動も手軽に起こしやすい』

そんな御時世であれば、当然地方の警察組織など頭数にもならない。世界中で常に戦が起こっている以上それは必然だった。

そんな暴動に対抗するため、四ツノ葉グループはここ『ゼルス要請学校』で国家専属軍隊の兵士を育てていこうと考え付いたと言うわけである。

それが、この世界を名実共に統べる世界そのものの政府機関である四ツノ葉グループが、島国一つを丸ごと使い設立したゼルス要請学校と言うわけだ。

入学……または在学可能な年齢は、十二歳以上であり、三十四歳以下である事。また、未婚者である事が条件である。

そう、条件は『たったのそれだけ』なのだ。たったそれだけの条件を満たし入学試験と簡単な面接を受け、尚且つ入学を志願した者は、例外なく入学を許可される。これは運営側の配慮で、一人でも多くの生徒を入学可能にするために考案されたものだ。

「今のBクラスの担任は確か……おお、カナナ先生だな!」

だがそんな事は良いとして……それにしても、鬱陶しい……。

この雨と、そしてこの男だ。じつとりとしたしつこさを持つ意味では似通ったこの二つは、レイナにとって最も強く不快の壺を突くものであった。

延々と続く背の高い寮を右隣に置きながら、左手を歩くアルミスを傘の下から見上げる。

「アル」

「なんだ?」

あくまで前の奴には聞こえない様な、小さな声で呟く。

「こいつブツ殺したい」

「我慢しろよ」

まるで動物を窘める様な扱いだった。

「カンナ先生は良いぞお。スラリ美女に敬礼！ スレンダーな眼鏡おねーさま万歳！ 世の中には『スレンダー』って所詮、ひんにゅうの負け惜しみに過ぎないよねー！』とか言う奴もいるが、馬鹿みたいに巨大な爆弾を自慢げにブラブラさしてるのーたりんの方がよっぽど……」

そもそも彼はアルミスもレイナも見えていない。ただ、二人を先導するついでに不快感をばら蒔きながら歩いているだけだ。

要するに、レイナ的には迷惑なだけなのである。

「……おっと」

だが男が急にピタリと脚を止めると、アルミスもレイナも、それに釣られる様に歩を詰める。

レイナがまた憤りを表情に表していたが、アルミスはそれはこの際置いておく事にした。

「到着だぞ」

ここに来て、漸く男が後ろを振り返った。

傘越しには少し判りづらかったが、こうして見るとその身長はやはり高い。

男は左手で二人の視線を促す。

「ようこそ、ゼルス要請学校学生寮区第六十七ノ九十八番『峰連荘』へ」

自慢げに言い放つ男の指し示す先には、少し古びた、コンクリートの建築物があった。

峰連荘……というらしいのだ。この学生寮は。

「野菜かよ」

「野菜かよ」

アルミスとレイナ、二人の声が被る。

「いやいや、ここは立派な学生寮だぞ。要するに、お前達の住む家

だ」

そんな事は判っている。だが、そんな事言われたって峰連荘では野菜にしか聞こえねえよ、とアルミスは思った。

そして、話題を転換させる要因が現れたのは、返答に困ったアルミスが苦笑いを浮かべた瞬間だった。

「あらデイノさん、こんな雨の中どうしたんですか？」

女性の声。それは穏やかで、暖かい母性の様なものを感じさせる……そんな声だった。

アルミスとレイナの視線が、声を逆に辿る。

「……あら？」

視線の先……峰連荘の背の低い玄関口に、女性が一人、小首を傾げて立っていた。

綺麗な人だ。レイナは兎も角、少なくともアルミスの第一印象はそれであつた。

頭の後ろで束ねられたブロンドの長髪に、目尻の下がった眼の中に湛えられたエメラルドグリーンの瞳。そして、包容力と、独特のミステリアスな空気を感じさせるその雰囲気は、この女性自身の優しさを直接的且つやんわりと漂わせ、相手にその魅力を感じさせるには充分過ぎるものがあると言えるだろう。

だがどうやら彼女は寮のエントランスの掃除をしていたらしく、兎がプリントされた、使い古したと思われる少し汚れた桃色のエプロンと、その手に握られた短い筭と金属製のちりとりが浮き上がる程極端に所帯じみており、そのガラス細工の様に儂い危うさを持つた空気を悉くぶち壊しにしていた。

「おお、我が嫁桃華じゃないか！ 掃除、ご苦労さん」

「はいはい。お帰りなさい、デイノさん」

恐らくデイノというのは、二人を案内して来たこの男の名前なのだろう。

振り返ったデイノの姿が傘に隠れたかと思うと、その下から歓喜にも似た声が上がった。

「ひょつとしてそちらの方々が……？」

「ああそうだそうだ、忘れてた。この二人が噂の新入生だ」

二人に向き直る事もなく、ただ親指で後方を差すだけで返すディノ。

「随分とぞんざいな扱いだなあオイ」

そもそも忘れられていたらしいのだが、それまで本気なのかは判らない。

「すみませんね。ディノさんこう見えて、適当なところあるから…

…」

アルミスとレイナは、適当にしか見えないが　という持論を心の奥にしまっておく事にした。何と言うか、ツツコミを入れるのすら面倒なのだ。

「あ、雨の中で立ち話なんて失礼でしたね。お二人ともどうぞ中に入って下さいな」

十

「私はこの女子寮の管理人と寮の総責任者をしています『須藤桃華』と申します」

「で、俺が男子寮の管理人で桃華の生涯のパートナー『ディノ・エメルド』だ」

峰連荘は、外見こそコンクリートであつたが内装は赤茶色の木材が主であり、そこはかとなない暖かさとアンティークな雰囲気を出していた。

そして、外見こそ弱々しくて細長く、どこか窮屈そうな印象を与えてきた寮ではあつたが、実際中に入ってみると、天井は高く、正面の受け付けの向こうには吹き抜けもあり、そのエントランスは意外な程に広い事が判った。

アルミスは、建築学的な心理効果もあるのだろうか？　とか思っ

ていた。そもそも、建築学という言葉自体どこか実体を掴みきる事が出来ない様な気がしたが、正直そんな事はどうだって良い事だった。ただ、これからここに寝泊まりする事になるわけだから、エントランスからいきなりこういう風に小綺麗なところは嬉しい。どこか得した気分になるのだ。

『いやっほう、やっぱりアンティーク最高！』

ってやつである。

「入寮手続きは以上です。アルミスさん、レイナちゃん。これからよろしく願いますね」

桃華はフロントのカウンターの向こうで薄い冊子をパタンと閉じ、再び顔を上げると微笑み、言った。

「あ、はい。よろしく願います」

「……よろしく」

ニコニコを崩さないそんな桃華に、少し笑んで返答するアルミス。対してレイナは『ちゃん付け』されたのが気に入らなかったのか、どこまでもぶっきらぼうな態度を崩さない。腰に手を当て視線は窓の外。ざあざあと降りしきる雨の中をただ泳ぎ回っている。

が、桃華はそんな事は気にせずに、話を次のステップへと移行させていた。

「デイノさん、アルミスさんをお部屋まで案内して下さいますか？」

十

どうやら桃華曰わく、アルミスの部屋は二階の三号室らしい。そして彼の目の前を歩くデイノが言うには、階段を上がれば部屋は目と鼻の先らしい。

「そう言えばお前、あの子とはどういう関係なんだ？」

ギシリと、木材の味とも言える音を二つ程奏でながら、薄暗く静

まり返った廊下を歩く中、ディノが唐突に口を開いた。案の定、こ
っちを向いてはいない。

「いや、どうと言われても……」

恐らく『あの子』というのはレイナの事なのだろう。だがそれだ
となると、正直答えに詰まる。少なくとも、アルミスにとってレイ
ナはレイナでしかないわけであって、それ意外には答えようがない
のだから。

「ああ、足元気を付けろよ」

ディノの足が廊下の真ん中から伸びた階段に差し掛かった。階段
は一段ずつ縦の面が抜かれていて、登りながらに真下が見えるとい
う代物だった。

「なんだ、答えられない様な仲なのか？」

「いや、別にそういうわけではなくて……」

階段を登りながらついでのように綴られるディノの問いに、アルミ
スはやはり答え方を思い倦ねていた。

『レイナはレイナである』それ意外に、考えた事はなかったから。

「まあ、レイナはレイナですよ」

仕方なしに、とりあえず、素直に言っておく。

「……なるほどね」

だがどうやら、ディノは何かに納得したらしかった。

「さあ、着いた着いた」

階段を登りきってから、左に一、二、三步。到着。早い。

「ここですか？」

「そうだ、ここがお前の部屋だ」

アルミスは部屋の扉に引っ掛けられた札に目をやった。

『三号室』と書かれた木製のプレート。どうやら、間違いなくここ
が部屋らしかった。

が、この『三号室』という字の左下に書かれた蛇の様な熊の様な
謎のイラストは、一体何なのだろうか？ これは、架空の生命体……
…？ いや、粘土細工？ いやいや、もしかしたらただのシミかも

しれない。書いてる途中に、コーヒーが何かをひっくり返したりして……。

「じゃ、開けるぞー」

「……………え？」

アルミスが件のプレートをマジマジと眺めていると、薄暗い廊下に扉をノックする音が二回、響き渡る。

ディノは中からの返事を確認して、取っ手を回し、ちょっと脆そうなドアを押し開けた。薄暗い廊下に、部屋の中の光りが射した。

「レン、いるかー？」

「いねーよ」

あまりにも嘘臭く、そしてやる気の感じられない声がした。間違はなく部屋の中からのものらしい。アルミスはディノに続いて廊下との敷居を跨ぎ、脱いだ靴も揃える事もなく入室した。

その部屋はアルミスが思っていた以上に広く、白い光に照らされていて、明るかった。床はフローリングではなく、ゼルスから見て東の方向に位置する『ジパング』という国では最もポピュラーとされる『タタミ』と呼ばれる物だった。踏みしめる度に、冷たくもなぐ暖かくもないという、乾いていてもしっとり感のある不思議な感覚が足の裏を掠めていく。

「ほい、起きて」

そしてディノは部屋の中央に行き着くなり、寝そべっていた人影に、いきなり右の蹴りを放った。

「ごほっ……………！ な、何だよ……………人が折角寝てるのを……………」

人影は何やら文句を垂れ流しながらも、のっそりと起き上がる。

青年だった。少し濁った黒の髪を逆立たせたその青年は、寝ぼけ眼をゴシゴシと擦り上体を起こす。

「アデルは？」

「風呂っ」

ディノの質問に対し、青年の返事はあまりにも淡泊であった。というよりも返事をするの億劫な様で、青年はアルミスに視線を向け

ると、またバタリと仰向けに寝転がってしまった。

「ほい、起きて」

デイノの蹴りが、また青年の脇腹に入る。

「っ……！……死んでしまえ」

と青年は毒づくが、眠気などとうに覚めていたのか、はたまた端から眠ってなどいなかったのか、その声に苛立った様子はなく、どうやら怒っているという訳ではないらしい。

デイノはアルミスの腕をグイと引き、自身の目の前に立たせた。

青年は未だ仰向けのままであったが、アルミスの姿を再度視認するとむくつと起き上がり、言った。

「ああ、これが噂の転入生なのか……」

また、噂である。果たして、いったい何が噂になっているのだろうか。

「そう言う事。ちゃんと面倒見てやれよ？」

デイノは言ってから「ま、そんなに子供じゃあないだろうーけどな」と、腰に手を据えて笑った。アルミスは、どこか置いてけぼりをくらった気分になった。

「あ、そうそう。荷物はもう少ししたら届くからな」

少しボンヤリとしてしまったが、アルミスは突然の重みに振り返ると、その左肩にデイノの指の長い手が乗っていた。

「じゃ」

どうやらデイノは退室するつもりらしい。サッサと靴を履き、逃げる様にせかせかとその長身をドアの外に消し去った。

「……………」

「……………」

圧迫感すらある嫌な沈黙だけが、余韻の様に残る。

「……………」

その短い沈黙を先に破ったのは青年だった。

青年は胡座のまま上体を前に倒す様にして右手で畳を叩き、振り返ったアルミスに言う。

このバンバンと叩いている事の意味は即ち『まあ座れよ』という事なのだろう。アルミスはそれに習い、青年の目の前に腰を降ろした。

そして青年は開口一番

「ぼくのおなまえは、なんでしゅか？」

とか、問う。

「ナメてんですか？」

「誰がナメるかよ、汚ねえな」

何がしたかったのか判らないが、とりあえず、自己紹介である。

「で、名前は？」

「アルミスです」

誤魔化す必要もないので、無難に答えておく。

そして次に口を開いたのは、当然、青年。

「俺はレン。レン・ペンブローク。ちょうど十九歳。で、一応室長」

この『ちょうど』がいったい何を差しているのかは知らないが、青年の言葉はやはり淡淡々としていて未だ掴みどころがなく、結局アルミスが理解出来たのは表面的なプロフィールだけであつた。

「まあ、この部屋には一応もう一人いるんだが……」

先の会話でアルミスも察していたが、やはりそうであるらしい。

レンと名乗った青年は、割としっかり閉じられた扉に目をくれる

と一瞬間を置き、

「ま、良いか……」

ボヤいた。そしてまた、ゴロリと寝転がる。

「……………」

「……………」

そしてまた、沈黙。どうやら今度こそ、本当に窮屈な沈黙であるらしかった。

少しだけ薄暗い木の床の廊下を一行に歩く。

電灯を使わずとも多少の明るさが確保されているのは、おそらく廊下を挟んで部屋とは反対側の壁の面積全てを占領しているこのワイドな窓のお陰なのだろう。窓の向こうには、多少小降りになりつつある雨と、多少狭い中庭が広がり、本来ならば細い筈の廊下も必要以上には狭く感じさせなかった。

「レイナちゃん」

どうやら、今私の前を歩く女性はハッキリ言って頭が弱いらしい。いや、別段これと言って間が抜けていたり意味不明な発言があるというわけではないが、こう、何と言うのだろうか……。

「だからその『ちゃん』ってのはやめてくれないのかねえ？」

「あら、ごめんなさいね」

笑ったまま謝罪されても、まるつきり信じられない。

だが私は、何度も繰り返し返したこのやりとりを、また何度もやらされるわけであって……。

「ところでレイナちゃん」

私はただ、黙ったまま溜息を吐く。肺から空気が絞り出されて、また呼吸をする事によって違う空気が入り込む。

「どうしたの？ レイナちゃん」

……もう良い。

溜息よ。肺の空気ではなくて、案内する人間を変えてはくれないだろうか？ ……頼むからさ。

「だから、さつきから『ちゃん』ってのをやめてくれって言っただけだな」

「あああら、そうなの？ フッフ……レイナちゃんったら、恥ずかしいのね」

訊いちゃいねえし。

「で、部屋はまだなのか？」

こうなったら、サッサと部屋に着いてこのストコドッコイとはおさらばするしかないだろう。

そう、部屋に着けば、私は自由なのだ。

「レイナちゃんの部屋は一階の三号室よ。後少し、頑張つてね？」
案の定笑顔で言つて、半身振り返り、意味もなく力こぶを作つてみせる。もつとも、その大きさはまるつきり皆無と言つて差し支えない様だが。

……もう良い、面倒だ。もう私は喋らん。私は貝だ。
「ねえレイナちゃん」

……貝である。

「レイナちゃんはここに来る前、どこにいたの？」
……詮索は嫌いだ。
「ジパングって、知ってる？ 私はね、その出身なの」

……興味ないな、あんな狭つ苦しい国。
「レイナちゃんって、アルミス君とはどういう関係なの？」

……あれは
駒だ。

「あらあら？ ひよつとして、言えない様な関係なのかしら？」
……ニヤニヤ笑いやがって。

「兄弟？ ……には見えないし……師弟関係……でもなさそうだし……」

勝手に盛り上がつてろよこのやろつ。

「あ、ひよつとして、恋人かしら？」

勝手に言つてろこのタコ。

「黙つてろトコロを見ると、図星？」

……論外。

「あらあら……。ウッフ、当たり」

ニッコニコ笑いやがって、嬉しそうだな。ったく。はいはい、それは何よりだ。

「みんなに報告しないとね」

「やめてくれ」

……何だか負けた気分だった。

「さ、着いた着いた」

笑いながら前を歩いていった女が、振り返る。その左手の誘導に従い右を見ると、明らかに脆そうな木製の扉が視界を覆った。ドアノブに引っ掛けられたプレートには『三号室』の文字。

「ここが『アナタ達』のお部屋です」

相も変わらず、ニッコニコのフルスマイル。

……いや、待て。今、何と言った……？

「達……？」

「そう、達」

怪訝な顔で問い掛けても、終始笑顔が崩れない。と言うよりも、この女に怒りや妬みと言った感情は存在するのだろうか。

「まさか……相部屋か？」

そんな質問に、女は首を縦に振って答える。

要するに私の嫌な予感、見事に的中していたと言うわけだ。つまり、これでしばらくプライベートはなくなってしまったと言うわけである。

「……最悪だ」

魂の様な何かが口から抜けて逝くのを感じながらガックリと肩を落とす。気が付けば、そんな言葉が口から漏れていた。

「じゃ、開けるわね？」

そんなこちらの落胆具合を知ってか知らずか、女は傍若無人なテンプで展開を突き進め、ドアを二回、軽くノックした。

「誰かいますか？」

女は返事を待たずに、問う。

「いないよー」

だが部屋の中から聞こえてきたのは、先ず嘘に違いない返事だっ

た。

いないなら返事など出来る筈はないのに、返事は返って来る。まさにお決まりの冗談と言えるだろう。そして真面目にこんな事を言う輩など、この部屋の人間を始め、大抵がろくでもないあんぼんだのであると、そう相場は決まっているものなのだ。

……そんな事を考えていたものだから、余計に憂鬱になってきた。そして気が付けば私は畳の上……部屋の真ん中に正座させられていた。

「あら、アメリカちゃんは？」

「桃華さん、アメリカに『ちゃん付け』はおかしいよ」

目の前に胡座を掻いて座っているのは、声の高い、金髪のポニーテールの女。年頃は、十代後半といったところだろうか。顔立ちは一見幼い印象を受けるが、その身に纏う雰囲気とやらが、彼女の年齢が見た目以上に高いものである事を物語っている。

「アメリカはね、今さっき出てちゃった。何か真面目な顔で『これはマズいわね……』とか言ってたよ」

と言つて、何やら真剣な顔付きとやらをやっている……つもりなのだろう、恐らく。だがそれは、少なくともシリアスな印象は毛の先程も伝わっては来ない様な、とんだ間抜け面であつた。

「て言うかさ」

間抜け面が、ビシツとこちらを向く。そして間抜け面はそのままの表情で、

「なにこれ？」

と問うた。

「レイナちゃん」

捻りのない回答が責任者の口から迸る。

フルスマイルに、ちゃん付けに、これ扱い。何だか酷いと思えた。袋叩きこの上ない仕打ちだ。

「あ、判った！　これが噂の転入生だ！」

「フフフ、正解」

また、噂である。果たして、いったい何が噂になっているのか。

「アイカだよ」

「えっ……」

一瞬自分に掛けられた言葉とは気付けなかった。だがさっきまでの間抜け面が、責任者である桃華の絹の様な笑顔とはまた違った、太陽の様な幼さを感じさせる笑顔になってこちらに向けられていたから漸く気付く事が出来た。

「アタシ、柊アイカ！ Aクラス！ 十九歳！」

ガツガツと、箇条書きの様にプロフィールを突き付けて来る。私はそれを全て飲み込もうとはせずに、要所だけを受け止めていた。

「よろしくっ！」

差し出されていたのは彼女の屈託のない笑顔と、握手を求める右手だけだった。

「……………」

だが私は正直、戸惑っていた。

握手とはすなわち相手に自身の『テリトリー』に入る事を許容する契約であり、儀式の様なものだ。そして、許容という行為には常に相手からの代償があり、また、自身も少なからず損害を被るリスクをも孕んでもいるのだ。あくまでこれは経験上の定義ではあるが、まるで間違った価値観とは言える筈はないだろう。

だが果たしてこの握手とは、そのリスクを背負うだけの価値のあるものなのだろうか……。もっともこの契約において、相手から代償が差し出される様子は十中八九見当たらないわけだが。

「……………まあ、よろしく」

それは、まだ判らない。だが判らないからこそ、様子を見るのも良いだろう。

私は、太陽の様に隔たりを持たない笑顔に対し、無表情よりも表情のない笑顔で、右手を差し返してみせた。

第二話『もう一人』

第二話

『もう一人』

止まない雨が窓を叩く音だけが、この部屋の唯一の音だった。それを除けばそこにある音は、アルミスの呼吸音と、ここの室長であるレンの寝息だけである。

……退屈だな。

アルミスは溜息を静寂の中に染み込ませ、ふと窓の外を見た。だが外は降りしきる雨と太陽光を遮る雲意外、見える物は何もなかった。

窓は、部屋の入口と対の位置に設けられた小さな物だった。コレといった変哲もない、至極スタンダードな横に長いスライド式の窓である。だからこそ、そこから得られるものなどが知れていた。「……………ああ、そうだ……………」

その突然の声は、レンが発したものだ。レンは徐に起き上がるとズボンのポケットに手をねじ込み、中から長細い携帯端末を取り出した。端末の中で光る液晶画面にはよく判らない変な彩色の動物が映っている。

「アデルにメールしとかないとな……………」

怪訝な顔をレンに向けるアルミス。レンは端末を適当に扱うと再びポケットの中にねじ込み、アルミスの視線に返し、言う。

「ああ、ちなみにアデルはこの部屋のもう一人の人間だからな」

「ああ、そうなんですか……………」

アルミスもどことなく予想はしていたのだが、レンからは寸分の狂いもない答えが返ってきた。面白みはないが、しかしながらに無難でもある。

「そう言えば……………」

再び、レンの口が開いた。今度はもう寝るつもりはないのかアルミスを目を真っ直ぐに捉え、続ける。

「お前、ここに来る前はどこにいたんだ？」

だが、質問の内容そのものも無難なものであった。それは実にスタンダードで、どこまでも無難なやり取りを求めるものだ。

「えっと……」

だがそんな無難な質問にすら、アルミスは答える事が出来なかった。躊躇う様に舌が足踏みをし、ただの一步すら進み出る事が出来ない。

果たして、どれくらいの間答え倦ねていたのだろうか。よくは判らないが、アルミスにはそれが酷く長くて辛い時間に感じられた。

「まあ、答えたくないなら別に良いんだけどな……」

だからレンのそんな言葉は、どこまでも救いの色に染まって見えて仕方がなかった。

「すみません……」

「いや、別に良いけどよ。……っか、そもそもここにいる連中の素性なんて逐一探ってたら埒が明かないからな」

「そうなんですか？」

「ああ。だから実際そう言うトコロは基本的にかなりアバウトだぞ。それに人間の経緯なんてもんは簡単に誤魔化せちまうからなあ」

サラリと言うが、これは実際は大した種明かしである。世界クルスの軍事施設の仕組みをバラすという事は、その情報が一步間違えて漏洩でもすればそれこそ軍そのものの崩壊に繋がる事もあるだろう。

だがそんな事を知ってか知らずか、レンは、そんな種明かしを事もなげに話してしまったのだ。まさか室長である以上はある程度の責任能力もあるだろうし、それを理解していないとも思えない。となると、彼自身が単にアバウト過ぎるだけなのか、それとも、新しい縁に対して凄まじく寛容なのか……。もしも後者ならば、レンは分け隔てのあまりない、心の広い人間なのだろう。アルミスは少し

だけ、肩から緊張が抜けていくのを感じられた。

「そのうち、話しますよ」

「そうか」

だからこそ、アルミスは話しても良いと思った。今はまだ無理だけれど、いつかは打ち明けてしまっても構わない、と。それもまた、礼儀のうちでもあると思つて。

そしてまた、室内に一瞬の沈黙が落ちた……。

十

「いやっほうレンただいまあー！」

ずしりとした沈黙を文字通りぶち破る歓声が、同時に部屋のドアをもぶち破った。

そしてそれとともに部屋に投げ込まれたのは、少年の様に高い声と、その持ち主。

「アデル……ドアが壊れちまう……」

レンの忠告などまるで暖簾に腕押し柳に風糠に釘。少年の声の持ち主はドアすらも閉めずに靴を脱ぎ散らかし、ズカズカと畳の床に踏み込んだ。そして、アルミスの前に立ちはだかると腰を屈め、まるで美術館の絵を覗き込む様にして……

「おお！ おおおお！ おおおおおおお！ 君が噂の転入生のアルミス君だね？！」

などと言つてのけた。

「は、はあ……」

また、噂である。果たして、いったい何が噂になっているというのか……。

アルミスはタジタジになり、その声の持ち主を見上げた。

くりくりした紅い瞳を据えた眼と、若干どころでは済まない程の幼さを残した表情。それらは悉く相まって、彼の印象をどこまでも幼い少年の様に見せていく顔立ちだった。だがその綺麗に整った鼻

筋と、シミの一つもない絹の様に汚れのない白い肌は、この少年の、撫でる様な美しさをハッキリと誇示していた。

「あれ、怖がつてる……」

少年は固まったままのアルミスを見たまま呟いた。と言うより、ボヤいた。

「えー、コホン」

すると少年は腰を上げ、わざとらしく咳払いをし、アルミスを見下ろした。そして左手を腰に当て、空いた右手でドンと胸を叩き、どこから来るのかも判らない自信に満ち溢れた表情を見せ付け、口を開く。

「僕はアデル。アデル・L・テリアです。クラスはそこにいるレンと同じでAクラス。十九歳。好きな食べ物はイカフライ!」

そして、そう言い切ってみせた。屈託のないその笑顔は、窓の外一面を支配する雲行きとはあまりに対照的であった。

「一応、コイツはこれでもAクラスで実地の成績がトップなんだ……」

……ふう」

アルミスが声に目をやると、レンが湿気にうだる様に上体を起こしていた。頭をガリガリと掻きながら、ぐいツと豪快な欠伸をかましている。

「要するに、今ここで一番強い」

「マジですか」

「うんうん、大マジマジマジ」

アデルは、否定は疎か、謙遜すらせずに首を縦に振って肯定する。如何にも自信があるような、自慢げな微笑だ。

「見えないだろ?」

レンの問いに、アルミスは横目でチラリとアデルを見た。……するとこれは、如何にも答えにくい問いになった。だがアルミスは、別に正直に言っても大丈夫なのではないかと言う印象があった。あくまで何となくだが、今日の前にいるアデルと言う青年は、その程度の事で目くじらを立てる人間には到底思えなかったのだ。

「確かに、見えないですね」

「だろ」

「いやむしろ男にも見えませんけどね」

「うわ、ひど」

「確かに見えない」

「わ、否定しないんだ……」

案の定、アデルはショックを受けた様子すらもかった。むしろその限りなく悦楽に近いものを表す苦笑いは、この状況を楽しんでいる表情と言っても間違いではない。

「まあ、よく言われるから良いか」

「割り切ってるし……」

室内に広がる笑い声。灰色の空に降りしきる雨とはあまりに対照的な、人肌に似た暖かさ。

「と、言うわけで……」

それから一瞬間を置いて立ち上がったのは、アデルである。立ち上がった後もシッカリと間を取って、腰に両手を当てて、ニヤニヤほくそ笑みながらアルミスを見ていた。

「ここで、もはや恒例となりました、入団テストを行いたいと思いますーす！」

彼の言ってる意味が判らない。意味が判らない。アルミスは口を半分程開けたまま動けずに、ポカンと、文字通り固まっていた。

「はい拍手」。ぽんぽかすかぽかぽん

「恒例ってなんだよ、恒例って」

どうやらレン曰く、この恒例行事は今回が初の開催になるらしい。あくまでも、この『この恒例行事』がである。

「じゃあ早速………じゃん。はい」

レンの問いにも受け合わないアデルが取り出したのは、何やらA、B、Cと、三つのボタンが装着された掌サイズの小さな四角い物体だった。

「こ、これは……？」

そして、それを無理矢理突き付けられるのは無論アルミスである。
「ちやかちやかん。三択クイズ」

なる程、これで意図は読めたと言うものだ。

……しかし、絶好調だ。今のアデルは、あまりにも絶好調である。
これはもはや誰にも止められない。隕石の落下に似た勢いと、究極なまでに手中に収めたイニシアチブが、今の彼にはあった。

だからアルミスも、もう抵抗するのは諦めていた。こうなったら
ドコまでも乗っていつてやろうじゃないか。つまりは出たとこ勝負
って奴である。

そうだ、男は度胸だ。ゴチャゴチャ考えるよりも、自分の度胸と
根性をキツパリと叩き付けてやるのが一番なのだ。

ついでに言うと、レンもツツコミするのを止めていた。

「じゃあ第一問！ でけでん！」

さあ、着やがれ！

あくまで固まったままの表情は崩さないが、アルミスは心の中で
とてつもなく凄んでいた。そりやもう、気迫だけで虫けらを撃ち落
としてついでにぐしゃぐしゃに出来るくらいに。

「パンはパンでも食べられないパンはなんでしょう！ A、コツペ
パン。B、アンパン。C、腐ったパン。D、フライパン」

考える間は、作らない。作らせない。脳が反応すると同時に、ボ
タンを押す。答えは

「Cの腐ったパンだっ！」

「残念！ パンダは腐らない！」

「な、何だとっ？！」

発音が違うなどとは突っ込まない。現に、腐ったパンでも食べる
即ち、咀嚼して飲み込む事が出来ないわけではないからだ。

「じゃあ」

だがそこで、戦慄した。もうこうなったら残る回答など一つしか
ないわけだが……、

なんと、こいつにはDボタンが存在しないのだった！

「Dのフライパン！」

だがそこは臨機応変に、正解を直接口に出してやる。

「ボタンヲオシテ、コタエテクダサイ」

「ないですよ！ ボタンないですよ！」

急に機械的な口調になったと思っただけ、とんでもない事をほざき出すアデル。と言うより、彼は絶対調過ぎる。

十

『なんか不毛だから止めてくれ』

レンがそう言っただけのアデルの暴走を止めたのは、第六十三問目『鼠は鼠でも空を飛ばない鼠ってなんーだ？ A、こんちゅう。B、夢中。C、円柱。D、ちゅう』の時だった。

「えー、何で止めるのさー……」

不服そうにむくれるアデル。その足元には、KOされてグッタリしたアルミスが横たわっていた。

「ねえアル、答えは？」

アデルはまだ続けるつもり満々らしく、ツンツクとアルミスを入差し指で突つつく。

「……死んでる」

「お前のせいだな」

「えー、それはやだなあ」

実際、本当に死んでいるわけではない。ただ、死んだ様に動けなくなっているのは確かだった。まるで、アルミスが今アデルと関わるのを拒んでいるかの様に。

「ん……。じゃあ三択クイズはここまでにして……」

アデルは『仕方ないなあ』と言った様子で立ち上がり、それに習って顔を上げたアルミスの視線を迎撃する。そしてまた両手を腰に当てて、不適に笑って言った。

「ちよつとアリーナ行こうか」

漸くまともな事を言い出したと思ったら、アルミスもいつまでも潰れている理由がない。躰を起こしてその場にペタリと正座して見上げる。

「アリーナ……？」

「うん、アリーナ」

そう答えるアデルの表情はどこか満足げで、何かアルミスを試している様だった。

第三話『入団テストとお姉さん』

第三話

『入団テストとお姉さん』

状況に釣られるままアルミスが連れて来られたのは、寮から最も近いとされる第七番アリーナだった。

「えつと電気は、と………………。あ、あつたあつた」

薄暗い中、ヒンヤリと冷たい床を擦る様に移動し、弄る様に壁に手を這わせるアデル。いくつかスイッチの音がしたかと思うと、天井からぶら下がった照明がパチ、パチと、目を眩ませない様ゆつくりと明るさを増していく。もうしばらくすれば、白く優しい光がアリーナ中を淡く照らすのだろう。

「ここはね、自主トレの為のアリーナなんだ。まあ今日は雨も強いし来る人はいないだろうけどね」

アデルはそう言うてにつこり笑うと、右手の壁の一角を促した。

「さ、好きなもの取って良いよ」

「好きなもの、って…………」

アルミスがその先を見ると、壁に立てかけてられた大小様々な、本物を模して作られた武器達が目に入る。どうやら木製らしいそれらはよく手入れが行き届いているらしく、新品にも似た光沢を放っている。

「僕はこれで良いや」

自然な手つきでアデルが手に取ったのは、一振りの黒い木刀。漆黒の闇を纏った、冷静の裏にある凶悪さが伺える様な黒だ。

「君の力を見せて欲しい」

木刀を鞘に納めた様に左手で持ち、ゆつくりとアルミスに振り返るアデル。だがその表情にいわゆる真剣さはなく、相変わらぬ笑顔がいた。

「さ、早く早く！」

「ち、ちよつと……！」

もたもたしているアルミスに、対応と武器を選ぶ選択肢はなかった。同じく一振りの木刀をアデルに投げ渡されると、アルミスはそれを反射的に握っていた。

「あ、ちなみに、別に殺してやろうとかって言うのじゃないけど、打ち込みとかそんな甘っちょろいのじゃなくて一応模擬戦だからそこんところよろしくっ！」

「なっ………！」

アルミスには考える暇すらなかった。木刀を両手で握った瞬間には、至近距離まで飛び込んでいたアデルの水平に放った抜刀を受けていた。

「っ！」

両手に痺れと痛みが走り、元からなかった戦意が更に抜けていく。アデルはアルミスから少し離れると、木刀を正眼に構えた。

「ほらほら、打っておいでよ」

挑発しているつもりはないのだろうが、十二分にその効果はあると言える台詞だった。だが、アルミスは乗らない。乗る理由もない。

「なんでいきなり……！」

「だから、入団テストって言ったじゃん」

一閃。アデルの放った水平の横薙を、アルミスは木刀を垂直にして受ける。

「ありや、アルは少しだけ経験値ありなのかな？」

「っ？！」

流れ刃から繰り出される面を受け止めると鏑迫り合いに入るが、アルミスの視界から、忽然とアデルが消えた。瞬間、軀を捻り、脇腹に木刀を打ち込むアデルの姿が写る。

「く、うつ………！」

「あ、受けられた……」

軀が勝手に動く。アルミスの頭の中には、何もなかった。無心に

なつて、ひたすら回避ポイントを探り当て、辛うじてアデルの攻撃を受け続けている。

「あはは、これは……」

だがアデルが動じる事はない。それどころか、その集中力が高まっていつているのが、アルミスの視覚からでもよく判った。

……彼は、オーラが違うのだ。

「楽しみだなあ……！」

纏っている、オーラが

「がっ?!」

刹那、アルミスの脳が揺れていた。次に顎に痛烈な痛みが走り、足元が乱れる。アデルを視認しているところではない。今は少しでも気を抜けば、その場に崩れ落ちてしまうだろう。だがアルミスは足の裏の感覚だけで、ワックスの塗られたアリーナの床を探し、兎に角しっかりと持ち直す。

「なっ……！」

膝だ。アデルの跳び膝が、アルミスの顎を捉えたのだ。だがアルミスがそれを認識した時には、アデルの横薙の胴払いが脇腹を確実に捉えていた。激痛が走り、打たれた方の足から力が抜けて膝が床を打つ。そして留めに、アデルはアルミスの肩を突き飛ばす様に足蹴した。仰向けに倒れ、アルミスは天井を仰ぐ。

ダウンを取られた。これで漸く終わり　と、アルミスは思っていた。そう、思っていたのだ。

「え　?!」

だが、アデルはまだ止まる気配を見せなかった。アルミスを跨ぎ、木刀を突き立てる様に振り上げる。明るさを取り戻した照明の光を、漆黒が跳ね返していた。そしてそれは、止まる事なく、垂直に振り下ろされる。

「ちよっ、アデルさん　!?!」

狂気……とでも形容出来よう。今のアデルの表情はどこまでもそれに等しくて、間違いなく何かに染まり切っていて、アルミスに与

えるモノは恐怖でしかなく、歓迎するつもりなど毛頭感じる事はなかったが、ただ闘いと、狂気への狂喜だけがベツタリと張り付いていた。

殺される……?!

頭では判っていても、あらゆる要素が全身に絡み合い身動きが取れず、アルミスは目を堅く閉じ、アデルが止まるのを待っていた。否、待つ事しか出来なかったのだ。

「っ……………！」

が、何時まで経っても予想していた激痛が走る事はなかった。だが同時に、アデルが止まる事もなかった。

アルミスは目を開ける事が出来ない。開けたくなかったのだ。あの狂気を、もう目にしたくはないから。

だが、アデルは止まっていた。瞼の向こうに狂気を感じてはいるものの、それ以上の痛みは来ない。

だがアデルは『止まってはいなかった』

「ちよっとおふざけが過ぎるんじゃないの？」

アルミスの耳に、違う声が届いた。女性のものだろうが、女の子と言うよりも『女性』に近いトーンの声。

「……………あえ？」

今度は、アデルの声。まるで布団の中で揺り動かされた子供の様に、ゆっくりと、アルミスから離れて行く。

「あ、あれ……？」

そして、今度は見知らぬ土地で迷子になった子供の様に、キヨロキヨロと周囲を見回し、目に入った姿に向けて言う。

「わ、アメリカがいる。……………何で？」

第三者の介入。それはアルミスの心に安堵を齎し、同時に全身に絡み付いていた恐怖と混乱を消し去っていった。重くシャッターを閉じていた眼が開き、瞳が捉えた光を脳内で画像に変えていく。

「『なんで？』じゃないわよ……………」

アルミスは声を辿って自分達が跨いだばかりの入り口を見た。そ

ここにあった影は、やはり、女性のものだった。

シャツとミニスカートからスラリと伸びた、華奢な割にどこか艶やかな肢体。濃い藍色の髪はトップも襟足も短く切られ、漂う色気に反して爽やかな印象を齎している。

アメリカと呼ばれた女性はアリーナの入口を潜り、目の前に広がる惨状を見回して

「こんな天気こんな所まで来てるなんて、随分真面目な生徒がいるのね、って思ってたみたい……」

拍子抜けした、と言わんばかりに溜息とともに落胆する。腰に手を当てているが、それはアデルがやる様な『えっへん』みたいな感じではない。どちらかと言うと、やり場のない宙ぶらりんになった両手を取りあえず置いておく為の措置に近い。

「大丈夫？」

アメリカはアルミスの下まで歩み寄ると、腰を屈めて右手を差し出した。アルミスはその柔らかな手を取り、立ち上がる。

「……………」

そしてそれっきり、黙り込む。

「どうかしたの？」

何と言って良いか、判らなかつたのだ。

単純に考えれば、ありがとうと、ただ一言だけ言えばそれで良い話。しかし今のアルミスの頭には、別人の様になったアデルの事しかなく、それについての礼は、つまり『身の安全を助けてもらったのだ』と言う事を自分の中で肯定する事になる。だが果たして、あそこでアメリカの止めが入らなければ、あのまま漆黒に打ち抜かれていたか……それが判らないのだ。ひょっとしたら、本当にただの悪ふざけでやっただけなのかもしれない。だがまだ出逢って間もないアデルの事がアルミスに判る筈もなく、あれが本気なのか、それとも悪ふざけなのか判らない。だからそんな、アデルの人間性を決め付けて割り切る様な事は出来なかつたのだ。

「あ、いえ……。……すみません、ありがとうございます」

だからとりあえず、現在形の礼を送っておく。それ意外に返す言葉は見つからなかった。

「……って言うかあなた誰？」

しかしそんな謝礼の返事とは、何ともぶっきらぼうなものだった。だがアルミスにはこの女性に悪気がない事もどことなく判っている。だから、わざわざ気を悪くする事もない。アルミスが答えようと口を開くと、だがそれより先にアメリカが割り込んだ。

「あ、ひよつとしてあなたが噂の編入生？」

また、噂である。果たして、いったい何が噂になっていると言うのか……。

だがアルミスが編入生である事に嘘偽りはない。アルミスには否定する理由もないので、首を振って肯定する。

「なんか馬鹿が迷惑かけたみたいだけど、気を悪くしないでね？」

謝罪と共に苦笑いを浮かべるアメリカ。だが果たして、彼女に謝る必要性があるのだろうか。

いや、ない。

だが本来謝るべきその存在は今アルミスの後ろで、つまらなそうに、二本の木刀を元あった棚に立て掛け直しているのだ。

「あ、ごめんなさい。紹介が遅れたわね。私はAクラスのアメリカ」
アルミスは、そうやって差し出されたアメリカの手を握り返した。いや、返すしかなかった。そしてその暖かい手がそれを握り返してくる。それは、柔らかくて、とても優しい手だった。

そしてアルミスも、簡潔に自分の名前と年齢だけを返して自己紹介とする。

「よろしく、アルミス君」

「はあ……」

溜息の様な返事。

アルミスの右手から温もりが消えると同時に、額に柔らかい緩い衝撃が落ちた。アメリカの手刀である。アルミスは、アメリカが怪訝な顔付きで放った白くて細い手を、視線だけで見上げた。

「ねえ、あなたひよつとして緊張してる？」

そうではない。そうではないのだが、この急過ぎる展開にアルミスの脳が追い付いていないだけだ。ただ呆然としてしまい、立ち尽くしてしまっただけである。

悪い癖の様なものだった。ここに来る前から、よくレイナにも「トロい」とか「のろま」だのと言われたものだと思いだす。

そうして、真っ直ぐ見つめられ「死ぬぞ」と、言われた事さえも。

第四話『GD（学兵デビュー）』

第四話

『GD（学兵デビュー）』

目の前が暗い。瞼が開いているのは感覚として判るのに、純粹な黒に包まれた視野は全てがただひたすら暗くて、瞳が何かを捉える事はない。黒以外の全てを見る事が出来ないのだ。

手を 肘から先だけを、少しだけ伸ばしてみる。

又メリと、湿った不快感。

他の物体がある。

どうやらここは、空間として確かに存在するらしかった。

そしてウンザリしつつも、アルミスは漸くそこで理解する。

ああ、またこの夢か……………と。

夢と理解してからは早かった。視界を支配していた黒は幕を引き、あらゆる意味で見慣れた光景が広がってゆく。

木目以外には塗装すらない、質素な天井。それにこびり付いた、赤と紅。

そして、ツンと鼻を突く、赤と朱の異臭。

これは夢なのだから感覚こそなかったが、記憶の奥底から掘り起こされる不快感だけは、痛みのない火傷の様にヒリヒリと躰中のあちらこちらにしっかりと染み付いてアルミスを締め付ける。

何か重たいものがごとりと倒れる音と共に、女性の声がした。

新たに吐き出される朱に、もう止めてくれと強く懇願する言の葉。音は、子供が倒れたものだとすぐに判った。この夢を見たのは初めてではないし、そもそも忘れよう筈もない。

言の葉を発した女性は、倒れた子供から止まる事なく流れ出る赤を必死に抑えながらも尚、懇願する。

たった今、アルミスの伸ばした指先が、子供の伸ばした指先とリンクして、赤に染まった不快感をダイレクトに伝えて来る。返り血……。それが、この不快感の正体だった。生暖かい不快感が、掌全体にぐちゅりと広がる。子供の僅かに伸ばした指先が、女性の服の裾を掴んだらしい。だがその指先が救いを得る事はなく、女性は子供から引き剥がされ、朱を吐き出した男達に奪われていった……。

あの子供は、いったい誰なのだろう。

アルミスは過去にも幾度となく、この夢を見ていた。だが、ここからでは顔を伺う事すら出来ないその子供はいったい何者なのかについては手掛かりすら何もなく、未だにそれが判らない。

これはたぶん、自分の過去の記憶だ。間違いなく、そうだと判る。何よりあの女性に見覚えがある事が何よりの証拠であった。

だが、それ以上は判らなかった。

男達に連れて行かれた女性は、この後どうなったのか。

ただ一人残され、光の宿らない瞳で天井を仰ぐあの子供が誰なのか。

そして、あの時自分は、果たしていったいどこにいたのか……。アルミスの意識が、子供の意識とリンクしてゆく。

全身が熱く、寒く、そして気だるい。脳が萎縮し、頭骨の中が重くなり、視界が急激にブラックアウトしていく。各内臓器官の機能が停止し、体温が下がっていくのが判る。直感的に理解する、強制的な死を迎える瞬間……。

自分は、どうしてこんな感覚を知っているのだろうか……。体験した事のない筈の死が、今、思い出す様に形になって迫っている。

呼吸が遠のいてゆく。苦しい。苦しい。苦しい。苦しい……。そうだ……。これが『死』なのだ……。

その時、子供は既に死んでいた。死因は、よくは判らないが、恐

らく、出血か何かだろうと予想出来る。だがそれはどうだって良い。問題は、子供の意識とアルミスの意識が、現在もリンクし続けているという事。

アルミスは生きている。なのに、全身には感覚として死が這いずり回る。詰まるところ、生きながらに死を味わうという体験はこういう事を言うのだろう。

ここは、どこなのか……。

何も見えない。

何も聞こえない。

何も触れない。

そう、何も……。

どっふ

「うぼううえあ?！」

腹部に圧倒的なダメージ。瞬時に死を押し付けていたモノはいなくなり、代わりにボロボロの天井と、精悍な顔付きの見慣れた少女が覗き込む現実へと戻る。

「案の定寝てたな……」

少女は荒い溜息を吐き、アルミスの鳩尾に食い込んでいない左腕を突いて躰を起こした。

「レ、レイナ、お前、馬鹿だろ……!」

アルミスは布団の中で悶絶しながら、腕を組むレイナを見ずに唸った。

この痛みの犯人は、間違いなく彼女の肘なのだ。

「馬鹿はテメーだよ。サッサと支度しろこの甲斐性なし。初日から遅刻だなんて、実に笑えねえよ」

「あ……………」

痛みは引かないが、躰を擦って壁に引っ掛けられた時計を見る。

「そっか……」

「そーだよ。判ったら早く起きて、着替えて、ソッコーで目え覚ませよ」

今日は、二人の学兵デビューの日なのだ。

十

レイナに言われた通り、アルミスはすぐに飛び起きて身支度を済ませ、肘をいただいた時点で既に目覚めていた意識を窓を開けて今一度解放。数秒間全身に朝陽を浴びせて体内時計を進めると、レイナに先導される様に峰連荘のエントランスに向かう。

寮の敷居を跨ぐと、案の定外は快晴。それは勿論部屋からでも確認出来たが、実際に室外に出てみるとやはり感じるものは大きく違っていた。

そして、第二に二人の目を引いたもの。それは、峰連荘の敷地内の土を踏んで静かに佇む、細身の影だった。

「あ、あなた達が新人さん？」

細身の女性は、落ち着いた声をしていた。

醸し出す態は大人びており、その着込んだブラウンのスーツがよく栄えている。ブロンドの髪は頭の上で纏められ、乱れる事なく伸び頂を撫でていた。

スツと整った鼻に掛かった眼鏡もよく似合っている。

「おはようございます。私があなた達の担任教官のカンナです」

そう言ってペコリと会釈するカンナの背筋は、腰を折っても一寸の乱れもなかった。

「えっ、あ、教官さんですか!？」

狼狽えるアルミス。心底情けないが、いきなり『上官』に出くわしたのではどう処理して良いものかは判らないだろう。

「まあそんなに緊張しないで。別に階級がどうのとか、私はそんなに気にしないからね」

そう言つて、ニツコリと微笑むカンナ。

「え、でも……」

彼女は甘いのだろうか。学生とは言え、国家組織の軍に属する以上それは軍人と変わる事はない。階級が絶対至上主義である軍隊に身を置く以上、果たして階級を気にしないなどという事は規律を正す立場の人間として如何なものかと二人は思ふのだ。

「ちなみに一番最近された質問は『彼氏はいますか？』よ」

だがそれは敢えて口にはするまい。二人はそう思い直した。たつた今。

たぶん、無意味な事だから。

「あら？ 皆さんお揃いでお出掛けですか？」

エントランスから声がした。桃華だった。桃華は愛用と思わしき竹箒を手に昨日と同じエプロン姿で、振り返る三人の視線を一手に浴びている。

「あ、おはようございます桃華さん。これからお二人を教室に案内させていただきますね」

昨日も一応連絡しましたけど、と付け加えるカンナ。

「あら……？」

が、当の桃華は口に手を当て一瞬逡巡すると、

「あらあら、忘れてましたね。うふふ」

などと言い出した。

「桃華さん、ひよつとして電話しながら寝てました？」

「ちよつぴり当たりです」

一様に笑顔。

「それはそれは……。管理のお仕事も大変ですね」

「いえいえ、そんな事ないですよ。うふふ」

一様に笑顔。

だがアルミスとレイナはと言えば一様に真顔であつた。いったい何なんだこれは……。

「はい、ここがあなた達の教室です」

カンナを先頭に二十分程歩いた場所にそこはあった。

全六階というステータスから判る様に、高さよりより広大な面積に拘った真つ白なコンクリートの大型建築物。上空からは『コの字』の形状をしているであろうそこが、ゼルス養成学校本館である。

二人が導かれたのは、その四階の一角を陣取る、Bクラスの教室だ。見上げた先のタグに書かれた正式名称は『ゼルス養成学校遊撃科Bクラス講義室』

その中から聞こえるのは他でもない。日中の繁華街と変わらない、人々の声や音達だ。

「ちよつと待つてね」

カンナは二人を制すると、相変わらずの笑顔で白い戸をスライドして室内に踊り入った。恐らく、呼ぶまで待て、という事である。

そして、カンナが手を二、三叩く音と共に先程までの喧噪が千切れる様に消え、文字通り、瞬間的に辺りから雑音が消えた。

別に同時に入っても構わないのではないかとアルミスは思うが、まあ何かしら変化球のつもりなのだろう。そんなアルミスの心の声すら隣にいるレイナに届くのではないかと思わせる様な静寂が、今、ここにいた。

「ふあ……」

が、そのレイナと言えば大きな欠伸を一つ披露していた。緊張感の欠片もありはしないが、マイペースな彼女らしいと言えらしいのだろう。

いつそ吞まれてしまえば楽なのだが、アルミスにはそんな考えは浮かばない。

「そんなに緊張すんなよ」

レイナが言う。アルミスは彼女に目をやり、次の言葉を待った。やはりアルミスの緊張が伝わっていたのか、それとも心理を読まれ

たのかは判らないがその胸中は筒抜けであつたらしい。

昔からそうだった。

アルミスはレイナに勝った事がない。それは、物理的にも、肉体的にも、精神的にもそうであり、そしてその差は近い様で遙かに遠く、アルミスがいかにもがいても変わらなかった。

それを自覚したのは、いつからだっただろう……。果たして、いずれそれがひっくり返る時はくるのだろうか。

カンナの声がした。二人を呼ぶ声である。

「ほらよ、お待ちかねのラブコールだ。サッサと入れよ」

レイナは道を開け、アルミスの先導を促す。

アルミスはひとまず、視線を落とした。

白い戸に、銀色のステンレスの取っ手。

手にし、その一瞬で逡巡し、真横に引く。

そして彼の中で、何かが変わる音がした……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8679d/>

宇宙の楽園～ソラノラクエン～

2010年10月10日00時28分発行